

あなたのスキルは社会に役立つ

エンジニアだからできる社会貢献

東日本大震災の発生直後に発足したHack For Japanや「市民が主体となって自分たちの街の課題を技術で解決するコミュニティ作り支援」を掲げるCode for Japanのメンバーを始めとして、日本各地で技術を活用した社会貢献活動が行われています。本連載では、防災や減災、地域の活性化や課題解決、そして人材育成など、「エンジニアだからできる社会貢献」の取り組みをお届けします。

第146回

4年ぶりの対面会場！ Code for Japan Summit 2023

●武貞 真未 (たけさだ まみ)
●田中 伶奈 (たなか れいな)

(Twitter) @mamisada

シビックテックコミュニティを運営するCode for Japan (CfJ) では、毎年秋ごろに日本最大級のシビックテックカンファレンス「Code for Japan Summit」を開催しています。2023年はCfJ設立10周年であり、サミットの開催も10回目となる節目の年だったため「これまでの10年、これからの10年」をテーマに掲げ、11月23日に開催しました(写真1)。本稿では、コロナ禍を境に大きく変化したシビックテックのこれまでと、まちづくりがアップデートされていくであろうこれからの未来について、参加者と登壇

者で考えながら対話した本イベントをダイジェストでお届けします^{注1}。

大人の文化祭、CfJ Summit

CfJのサミットでは、グラフィックレコーディング^{注2}やUDトーク^{注3}、セッションサポート、配

注1) <https://summit2023.code4japan.org/>

注2) 絵や図形などを用いながらセッション内容をリアルタイムでまとめていくこと。

注3) 話している言葉を文字起こしし、多言語に同時翻訳できるツール。

◆写真1 Code for Japan Summit 2023の集合写真



信、受付・会場案内、司会、広報、統括など、役割ごとに運営委員が準備を行い、そこに当日スタッフとしてボランティアのみなさんが加わって、一緒につくっています。今回は空路・陸路のアクセスを考慮し、日比谷・有楽町（東京）に会場を設けつつ、一部セッションのオンライン配信も行いました。

基調講演「社会をハックする」

前半は「特務機関NERV防災」アプリを開発しているゲヒルン株式会社の代表取締役である石森大貴さんによるプレゼンテーション、後半はCfJ代表の関治之さんとのクロストークでした（写真2）。

「世の中には問題を抱えたシステムが星の数ほどある」という石森さんの投げかけからプレゼンテーションが始まりました。オープンデータの中には本来機械が判読可能な形式になっているべきにもかかわらず、人が読むことしか想定されていないために正規化されていないものが多々存在しており、同じスキーマで読めるように変換して統一フォーマット化する作業や、コードが統一されていない情報を集約してマッピングしなおす作業が必要になっています。機械可読性の観点では「スキーマに制約があって」「広く普及していて」「ライブラリがたくさんあって」「クエリを簡単に組み立てられる」データベースファイルが理想的だという提案には、満席の会場からたくさんの共感と賛同のうなずきがありました。そしてデータの利活用について、

◆写真2 プレゼンを行う石森さん（左）と関さん（右）



- データがあってもすぐに役立つわけではない
- データの入力コストが高く、民間で活用するには高いハードルがある
- 情報の上流側が整ったメタデータの必要性を認識していない

といった課題点が挙げられました。

防災アプリ「特務機関NERV防災」では、国や自治体で仕様が統一されていない、タイミングもバラバラに発表される災害関連情報を整理・統合して提供しています。一方でそれらの集約された情報が「ユーザーの判断を誤らせる可能性」「ユーザーの選択肢を奪う可能性」も常に考慮し、避難経路の提案や行動指南などは行わず、判断材料の共有に徹しているとのことでした。またアクセシビリティへの対応として、18パターン画面配色、スクリーンリーダー用のレイアウトやふりがなの調整、英語対応、音声合成など、アプリを直していきながら防災アプリのデファクトスタンダードをつくっていかうという観点で進めているというお話もありました。

後半の石森さんと関さんのクロストークでは、社会課題へのアプローチにおけるスタートアップとシビックテックコミュニティのアプローチ方法について、技術自体よりも関係者との合意形成の難易度が高いことが共通点として挙げられました。また、相違点としては「ともに考え、ともにつくる」とCfJが掲げるように「共創」に重きをおくシビックテックに対して、企業では創業者や経営者が事業戦略や投資の意思決定を行うことが挙げられました。

最後に社会課題の解決に取り組みたい人に向けて、「起業はお勧めしません」と石森さんが笑いを誘いつつ、「解決したい課題に対して法的根拠のある現場に入り、ドメイン知識を得てから次のステップ（シビックテックへの参加など）に進むこと」「技術は後からでも学べるので、まずは課題に焦点を当てること」が良いプロダクト開発の第一歩、との助言もありました。



「シチズン・インクルージョン」

IDEO Tokyoのエグゼクティブディレクターであるアリオラ金田・アンナさんからは、今後の社会に大きなインパクトを与える可能性が高いAI/ML（人工知能と機械学習）について、またこれらと共存していく私たちの社会におけるデザインの必要性について紹介がありました（写真3）。AI/MLへの適応が遅れた組織や個人が被るマイナスの影響について指摘しつつ、これらを正しく理解し活用できる社会を実現するために必要な視点として3つのキーワードが挙げられました。

Black box society(s) : ブラックボックス化する社会

技術と法律の専門家であるFrank Pasquale氏が提示した言葉で、ハイテクプラットフォームが人々の生活の支配力を強めるにつれ、ますます不透明になっていくさまを表しています。ブラックボックス化する社会で秘密主義は臨界点に近づきつつあり、重大事項の決定プロセスが闇に葬られていく現状に警鐘が鳴らされています。とくに日本においては、沈黙を守ってきた科学者や技術者がこれらの課題点や解決策について政府や企業にどんどん声を挙げていくことで社会の変容を促すことが求められる、とアンナさんから提起がありました。

T-shaped person : T字型人間

私たちはT字型の人間になるべきだと語られ

◆写真3 アンナさん(中央)と通訳の三井聡子さん(左)、ファシリテーターの原田朋さん(右)



ました。Tという字は縦に深く、横に広がりを持っています。AGI（汎用人工知能）と共存していく社会の実現に向けて、エンジニア、デザイナー、研究者などそれぞれの専門領域を推進するT字型の（専門性が深く、他領域への接続性がある）人たちが連帯して共創していくことが求められていきます。これはエラーやリスクへの対峙^{たいじ}などを含め、感情的にも知的にも難易度の高いことであると同時に、市民としての意思、人間や社会について考える意欲を持ち続けることが不可欠になります。

Intersectionality design : 交差性の設計

人種、年齢、性的指向、性自認、身体的認知的能力など複数のアイデンティティが交差し、二重、三重の差別や抑圧を体験している人たちが存在します。マイノリティの中でもとくに社会からの注目が集まりづらい状況にある当事者を可視化し、データに反映し、障壁になり得るものを多面的に考慮しながら疎外されがちなわずかな人々を融合していくデザインを意図的に行うことは、結果的に彼らのみならず市民全体のニーズへの対応を可能にします。また、時間軸を含めると自分より後に生まれた人たち、そしてその先の未来を生きる人たちにとって、自分たちが今行っている設計や開発がどんな価値や影響をもたらし得るのかも考える責任があるかもしれません。

アンカンファレンスもとい “Ask Me Anything アリーナ”

CfJ Summitでは毎回終盤に「アンカンファレンス」と呼ばれる時間帯を設け、当日会場に参加している人たちからの発案で内容を決めて、興味があるテーマのところそれぞれが集まって対話をする機会を設けていました。しかし、自由度が高く主体性が求められるがゆえにアンカンファレンスへの参加に難しさを感じたり、発案することを躊躇^{ちゆうちよ}したりする人がいました。また、今回は対面イベント自体が久しぶりであ

るため、フリートークに近い形に対しての課題感がありました。そのため、今回は少し趣向を変え、各セッションの登壇者を呼びかけ人として、聴講者と車座で対話していく形を実施しました。グラフィックレコーディングしてもらった模造紙を見ながら感想を言い合ったり、登壇者が逆質問したり、自分たちの事例を共有しながら話を発展させていったりして、終了時間を案内しても誰も立ち上がらないほどに意見交換が盛んに行われました(写真4)。

「自由にどうぞと言われるとどう振る舞えばいいか迷ってしまうけれど、補助線があれば進みやよくなるので楽しかった！」という声もあったので、セッション時間が短めのカンファレンスや異なるバックグラウンドをもつ人々が集まるようなイベントには、補助線つきのアンカンファレンスとしてこのような形式を設けるのもいいかもしれません。

これまでの道のりと これからの指針

シビックコミュニティは2020年からのコロナ禍にオンラインでできる課外活動・ボランティア活動として参加者が急激に増えていたこともあり、今回のサミットは半数以上が初参加の方でした。コミュニティのチャット上やオンラインハッカソンでの交流があった方同士が「〇〇さんですか?」「はじめまして」「初めてじゃない気がしますね」といった会話をしている場面も多くあった一方、2019年以前から参加していた方同士が「久しぶり!」「懐かしいね」「変わらない

◆写真4 アンカンファレンスからアップデートしたAMAアリーナ



いね」などと声を掛け合って再会を喜んでいる場面も共存していました。また、立ち上げ当初の状況を振り返ったり、数年前のセッションと今回のセッションを重ねたりしながら、これまでに提起していた課題の進捗を実感する人たちの声もうかがうことができました。

シビックテックは特定領域の課題を解決するわけではなく、市民の暮らしやまちづくり、社会に関連するあらゆる課題がテーマとして持ち込まれ得る裾野の広いコミュニティです。貧困や差別、環境問題や地域経済など壮大なテーマに立ち向かっているプロジェクトチームも多く存在し、「まだまだ課題がある」「ゴールが見えない」と感じる場面は少なくありません。前を見ると課題は山積みで、ふと気を緩めるとその壁の厚さや大きさに押しつぶされそうになることもあります。サミットの役割は、年に一度集まって定点観測しながら、お互いをたたえ合ったり、励まし合ったり、背中を押してもらったりすることで、持ち場に帰ってまた進んでいくための活力を相互補完し合うことなのかもしれません。

シビックテックは市民のもので、誰もがコントリビューターになれますし、自分自身や周りの人たちのために実現したいものを自分たちでつくってみることもできます。まず一步踏み出すことで、コミュニティの仲間と対話したり、学び合ったり、応援し合ったりしながら、1人ではたどり着けないところまでお互いの背中を押しながら進んでいくことができます。サミットは年に一度の開催ですが、プロジェクト持ち込み型ハッカソン「ソーシャルハックデー」は毎月開催しています^{注4)}。スキルを持ち寄りながらチームで社会をハックしていくこと、あらゆる市民をインクルージョンしたデザインや開発の実現にチャレンジすることにおもしろさを感じた方は、ソーシャルハックデーにぜひ遊びに来てください **SD**。

注4) <https://code4japan.peatix.com/>